

Title	杉山隆一君博士学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.4 (2011. 12) ,p.163(439)- 169(445)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20111200-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

杉山隆一君博士学位請求論文審査報告

論文題名

サファヴィー朝後期からガージャール朝末期にかけてのイマーム・レザイ廟の発展とワクフ

論文の概要

イスラームの聖地は、大きく二つのカテゴリーに分けられる。一つは厳密な一神教信仰にもとづくもので、唯一絶対なる神にアッラーの居所であるメッカがそれにあたる。これに対して聖者崇拜に由来する聖地というものも、イスラームには数多く存在する。預言者ムハンマドの墓廟があるアラビア半島のメディナ、シリア派の初代イマーム・アリー、第三代イマーム・フサインがそれぞれ埋葬されているイラクのナジャフ、カルバラ、そしてトルコを代表するスーフィー教団であるメヴレヴィー教団の創始者ルーミーの墓廟があるコンヤなどをそのような聖地、聖域の例として挙げるができる。

杉山隆一君が博士学位請求論文のテーマとして取り上げたイマーム・レザイ廟は、イラン東北部ホラーサーン地方の中心都市マシユハドにあるシリア派第八代のイマーム・レザイの墓廟である。レザイはアッバース朝カリフとのイスラーム共同体の指導権をめぐる複雑な関係のなか西暦八一八年にこの地で亡くなるが、シリア派の信徒たちは指導者の一人であるイマーム・レザイが死んだ後でもその霊力は残り、その墓に参れば病気が

直ると信じ、イマーム・レザイ廟への参詣を盛んに行うようになっていく。この結果、墓廟があるマシユハドは次第にイランにおける最も重要なシリア派の聖地になっていった。

マシユハドという町が宗教都市として拡大・発展するのは、シリア派がサファヴィー朝によってイランの国教とされる一六世紀以降のことである。このイマーム・レザイ廟を核にしてできたマシユハドという宗教都市の拡大と発展、その変容の過程を、墓廟に対してなされたワクフと呼ばれる財産寄進制度を通じて明らかにしようというのが杉山君の論文がめざすところである。

ワクフとは、イスラーム関係の宗教施設をつくり、それを維持、運営していくために必要な不動産、動産等を寄進する行為のことをいう。イマーム・レザイ廟は、これらの寄進財を多く集めることによつて核となる墓廟のみならず、その周囲にモスク、マドラサ(神学校)、図書館、病院、孤児院、参詣者を饗応するための諸施設等を増築していき、複合的な聖空間を広げていった。これらさまざまな施設からなるイマーム・レザイ廟の経済的な基盤になっていったワクフがいかなるものなのか、その実態と変容を膨大なペルシア語で書かれた文書史料を駆使して、一六世紀末のサファヴィー朝後期から一九世紀末のカージヤール朝期までの約三〇〇年間を視野に入れて考察したのが杉山君の論文の内容である。

論文の構成は、以下の章節からなっている。

はじめに

第一章 サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザイ廟のワクフ

I はじめに

II レザイ廟のワクフ財

1. ワーキフの分類とワクフ寄進の意図

2. レザイ廟のワクフ財の種類と地理的分布

III レザイ廟にてワクフが提供した施設・制度

1. 廟におけるインフラ整備と管理

2. 参詣者・貧者らへの慈善

3. 廟内の学術施設―図書館・マドラサ

4. サイドに関するワクフ

5. シーア派的な儀礼・慣習とワクフ

IV おわりに

第二章 *Nader Shah* 勃興期からアフシャール朝期におけるイマーム・レザイ廟

— 廟へのワクフ、ならびに廟の運営面を中心に

第一節 当該時代のレザイ廟の発展とワクフ寄進

I はじめに

II *Nader Shah* 登場期―アフシャール朝のレザイ廟の発展―当該時代のワクフを中心に

1. *Nader Shah* によるマシユハドとレザイ廟に対する庇護政策

2. 当該時代におけるレザイ廟に寄進されたワクフ

フ財の特徴

3. 当時のレザイ廟におけるワクフ対象

III おわりに

第二節 *Tunare-Alishah* から見る一八世紀中葉のレザイ廟の管理と運営

I はじめに

II *Tunare-Alishah* から見るレザイ廟の財政基盤

1. ワクフ財について

2. ワクフ財以外からの収入

III 当時における廟の運営組織、施設・制度

1. 廟における主要な職掌と運営組織の特徴

2. 廟のケシク部門

3. 廟における宦官

IV 廟の複合施設・諸部門等の運営の実態

1. 廟における物品の調達システム

2. *Boyutā* 部門の構成と業務

3. その他の支出ならびに病院・図書館などの施設や組織

4. 廟の特殊な機能・施設・制度

V 支出総額

VI おわりに

第三章 ガージャール朝期におけるイマーム・レザイ廟の発展と変容

I はじめに

展と変容

II ガージャール朝期レザール廟の拡大と建築活動

III ガージャール朝期におけるレザール廟のワーキフとワクフ財

1. ガージャール朝期のワーキフの特徴
2. ガージャール朝期にワクフ寄進されたワクフ財の種別と地理的分布

3. 自由ワクフ財と用途指定ワクフ財

4. ワクフ財としてのマシユハドの商業施設

IV ガージャール朝期の廟の運営組織と職員

1. 主要な廟職員

2. コーラン読誦者・ケシク・参詣祈禱書読み職

V ガージャール朝期のレザール廟の運営とワクフ対象

1. 廟自体の運営

2. 貧者・参詣者への慈善

3. サイイド関連のワクフ

4. シーア派的なワクフ

5. 学術センターとしてのレザール廟

VI おわりに

おわりに—まとめと今後の課題

以下、各章の論述内容を要約しながら、その評価、問題点について述べることにしたい。

第一章では、サファヴィー朝後期にイマーム・レザール廟に寄進されたワクフ財の具体的内容を廟の運営、参詣者・貧者への慈善、学術施設、サイイドへの崇敬、シーア派的なワクフの五つに分類し、その地理的分布、それらを寄進した者たちの名前と社会階層、もろもろのワクフ財を財源にしてつくられ、運営されたイマーム・レザール廟の概要と廟を中心につくられた聖化された空間がワクフによっていかに変容していったのが文書史料を踏まえて詳説される。考察にあたって杉山君が主として依拠し、使用した史料は、(一)マシユハドにあるレザール図書館が所蔵する写本 *Katābe-ye Mowqāfāt-e Āstān-e Qods*、(二)テヘランのマレク図書館所蔵の写本 *Vaqhānāmeh va Asnāde Āstān-e Qods-e Raza'i*、(三)テヘラン中央図書館所蔵の写本 *Asnād va Vaqhānāme-ye Āstān-e Qods*、(四)1899年にマシユハドで出版された石版本 *Āhtar al-Raza'iye* である。

これらの文書史料に記された内容は、財産目録という性格を有するということから煩雑を極めるが、杉山君はこれらの史料を克明に粘り強く読み、丹念にそれを解釈することを通じて大略、次のようにワクフの実態を整理する。まず、寄進されたワクフ財は、大別して農地、村落から得られる地代、水利施設の使用料など農業関連のものと、バーザール(常設店舗が連なる市場)、キャラバンサライ(隊商宿)などから上がる商業関係の賃貸収入とから成り、それぞれのワクフ財は地理的にはマシユハドとその近郊にそのほとんどが分布し、遠隔地から寄進されるワクフ財はきわめて少なかった。

このように寄進されたワクフ財の分布という点からすると、イマーム・レザイ廟は、マシユハドという都市とその周囲に広がる農村が形づくると比較的狭い地域社会に経済的には強く依存していた。しかし、ワクフ財の寄進者に目を向けると、サファヴィー朝の王族、それに仕える官僚など支配エリートが多く名を連ねており、経済的な寄進行為を通じてイランにおける最大のシリア派聖地たるイマーム・レザイ廟に対して影響力を及ぼそうとする中央の政治的な意思も見られ、地方史の枠組みのなかにイマーム・レザイ廟を封じ込め、矮小化して見ていくことはできない。

ただ、ワクフ財を財源として建設された墓廟とそれに附属するモスク、マドラサ、図書館、病院、孤児院、参詣者を饗応するための諸施設を実際に管理、運営するモタヴァツリーと呼ばれる責任者、管財人の職位に就くのは、代々、マシユハドの地域社会において隠然たる影響力を保持してきた預言者ムハンマドの血筋を引くサイイドと呼ばれる名望家であるのが通例であり、このかぎりにおいてイマーム・レザイ廟のワクフは、基本的にはマシユハドという地方社会に強く根ざすものであるというのが、杉山君がこの章でとくに強調する点である。

第二章では、一七三六年、サファヴィー朝に代わってマシユハドを首都に創始されたアフシャル朝期のイマーム・レザイ廟のワクフが扱われる。この王朝はシリア派に対立するスンナ派を奉じる政権であり、宗教的、軍事的理由から一時的にイマーム・レザイ廟が保有するワクフ地を接収するということも行

った。しかし、全体としてみると、シリア派を懐柔するという見地からマシユハドの聖地に対しては庇護政策で臨み、この結果、イマーム・レザイ廟のワクフに関係する権利も多くがそのまま保持され、廟とそれに附属する諸施設の管理、運営も従来通り続けられた。

この章で杉山君は、第一章と同様にワクフ財の内容、その地理的分布、寄進者、廟とそれに附属する施設の運営についてワクフ文書にあたり実証的に明らかにする。そうしたなか、とくに力を入れて論じるのが、宗教組織としてのイマーム・レザイ廟の経営をめぐる問題である。これを調べるために、杉山君は廟の収入と支出、運営組織、職員構成、運営規則に関して細かく記す *Tināne 'Alishāh* なる会計関連の史料に着目する。この史料を読むと、通常のワクフ文書には出てこない寄進財を財源とする資金の流れと運用の仕組み、それを使ってつくられる廟の運営組織の実態を明らかにすることができるが、この史料を綿密に分析し、杉山君はイマーム・レザイ廟の組織としてのあり方を次のように指摘する。

イマーム・レザイ廟は、モタヴァツリー(管財人)を頂点に彼を補佐する主としてウラマーやサイイドなどの貴顕出身の役職者から構成される評議会と管理・財務部門を有し、これらが廟とそれに附属する諸施設の運営方針を決定し、実際に執行する権限をもっていた。この下に聖地を訪れる参詣者を輪番で警護、管理するケシクと呼ばれる組織があり、さらに参詣者、貧者に対して礼拝用の照明、食事を供する等の便宜をはかる多数

の従者、職員がいた。その職掌、俸給等について杉山君は史料に則して煩を厭わず、丁寧に逐一記す。微細な事実の記述が多すぎるといふ面は否めないものの、史料的にも内容的にも濃厚でオリジナリティーに溢れる記述になっている。またこのようなイマーム・レザール廟の運営組織が、サファヴィー朝やアフシヤール朝などイランの伝統的な王朝が有する宮廷組織のなかに設けられたハラムの空間に相似するという指摘にも、国家の組織と対比させてその類似性の面からイマーム・レザール廟を巨大な宗教組織として捉えようとする杉山君の卓越した組織論がよく出ている。

第三章では、シーア派の信仰がサファヴィー朝、アフシヤール朝の時代と比べて、さらに深くイラン社会に浸透していくようになる一九世紀以降のカージャール朝期におけるイマーム・レザール廟のワクフの問題が扱われる。この時期に顕著に見られるようになったこととして、ワクフ財のあり方が以下のように二つの面で変化したことが挙げられる。

第一は、イマーム・レザール廟のワクフ財のなかで、マシユハド市内にあるバーザールの店舗、キヤラバンサライなどから上がる賃貸収入を原資とする商業関連ワクフの数が増加したことである。近郊の農村に分布する農業関連ワクフと比べてどちらの収益が多かったのかまでは明らかにできないものの、杉山君は廟に対してワクフとして設定された店舗の業種と店舗数について史料にもとづいて詳細に調べ挙げ、マシユハドという町がワクフの寄進増加によって一九世紀以降、門前町、宗教都市とし

て急成長を遂げ、さらに参詣者の数も大きく増えたことよって結果として町の経済が潤い、都市として発展したと論じる。

第二の変化として挙げられるのは、一八世紀までマシユハドとその近郊にほとんど限られていたワクフ財の分布が、マシユハドから遠く離れた他の地方、遠隔地にまで広がるようになったことである。これを杉山君は、サファヴィー朝時代に国教となったシーア派信仰がカージャール朝期になってさらにイラン社会の隅々にまで浸透した結果だととらえる。ただし、イマーム・レザール廟の場合、イラクにあるナジャフ、カルバラーのよゆうな聖地と比べると、国境を越えた広域的なシーア派諸地域からワクフ財を集めるまでには至らず、あくまでもイラン国内からの寄進にとどまっていた。この限りにおいて、イマーム・レザール廟の信仰・参詣圏の広がりには、イラクにある二つの聖地と比べると、狭かったといえる。しかし、それでもこの廟がイランにおけるシーア派の最重要参詣地になっていったことは間違いない。こうした聖地としての拡大・発展を踏まえてカージャール朝の時代になると、イマーム・レザール廟で行われるシーア派の最も重要な宗教儀礼の一つであるタアズイーエ（第三代イマーム・フサイン殉教を悼む哀悼行事）、ロウゼハーニー（フサインの死を悼む哀悼詩の朗詠会）に対して多額のワクフ財が寄進されていくようになったという。

審査要旨

現在のイラン・イスラーム共和国の体制下でワクフ制度につ

いて研究することは、政治権力を握るウラマーたちの経済的な力の源泉を探ることにつながるという面をもち、これに対する宗教勢力の側からの警戒心もあって多大の困難を伴う。イマーム・レザイ廟にかかわるワクフ文書の原本を自由に閲覧することも厳しく制限されている。こうした状況のなかで杉山君は、二年余りにわたるイラン留学中にマシユハドに度々赴き、イマーム・レザイ廟附属図書館に所蔵されている文書を精査し、帰国後もそれを続けてきた。今回提出した博士學位請求論文で実際に使った主たる史料は、原文書の複写が禁止されているために一九世紀に筆写された文書の写本と石版本をまとめた『文書集成』である。こうした厳しい制約のなかでペルシア語史料に果敢に立ち向かい、大部な論文にまとめあげた杉山君の情熱と根気は十分に評価されるものがあると思われる。

杉山君の論文のなかでもっとも独創的で評価されるべきところは、第二章のイマーム・レザイ廟の運営組織を扱った部分である。これまでほとんど参照されることのなかった会計関連の史料を縦横に駆使して廟の運営に関わる役員、実際の維持・管理にあたる職員の内情、イマーム・レザイ廟とそれに附属するモスクがそれぞれどのように組織として維持・運営されていたのか、ペルシア語で書かれたワクフ文書にもとづいて詳細に論じており、読みごたえのある立論になっている。すでにドイツの研究者クリストフ・ヴェルナーによる小論も出されているが、史料の読みの深さ、内容の豊かさにおいて杉山君の論文はそれをはるかに凌駕するものになっている。

ただ、今回の論文のなかで十分に触れることができなかった部分もないわけではない。たとえば、杉山君の主たる関心がイマーム・レザイ廟の運営組織の制度史的な解明、それを踏まえた宗教と政治権力との関係にあるということもあって、ワクフ制度のもう一つの重要な側面である慈善的、救済的要素にかんする言及が少なかつたことを指摘しておきたい。周知のようにイマーム・レザイ廟は、サファヴィー朝、アフシャール朝、カージャール朝という国家、政治権力に対抗して堅固な宗教組織をつくりあげていく一方、イマーム・レザイ廟を訪れる参詣者に対してさまざまな便宜をはかり、また病院、救済施設、マドラサ、図書館等を通じて病に苦しむ者、貧者、神学生などに社会的、知的サーヴィスを提供するという面をもっていた。このような活動を通じてイマーム・レザイ廟が一般の民衆とどのようにつながっていたのかを明かにしていくことは、ワクフ研究のもう一つの重要な側面である。

杉山君の研究は、ワクフ財の寄進を通じてマシユハドという都市社会とその近郊にある農村社会との経済的なつながりを明らかにしたという点で、これまで郷土史研究のレベルにとどまり、アカデミクな歴史研究とは言い難かつたマシユハドの地方史研究を一步前進させることに貢献している。特にワクフ財関連の記事を文書史料から細大漏らさず拾い出し、それを精密な表のかたちにして示した部分は、労作と評するにふさわしい中味の濃い内容になっている。ただし、あまりに膨大なワクフ文書の情報量に呑み込まれてしまって事実の列挙に大きな精力

が割かれてしまった面がないわけではなく、ワクフを通じてマシユハドという都市と周辺の農村とが有機的にどのようなつながり、地域社会を形づくっていたのかという分析が若干甘くなっていることは否めない。

サファヴィー朝後期からカージャール朝末期に至る三〇〇年という長い期間にわたるワクフ財の寄進を通じた都市と農村の関係について、杉山君は地域をマシユハドおよびホラーサーン地方にとどめず、イラン全土を視野に入れたワクフ財の地理的分布の遠近からその変容を論じるという分析の手法をとっている。こうした視点はイマーム・レザイ廟をイラン全体のなかで位置づけていくという点でももちろん重要であるが、これとともにマシユハドという地域社会に絞ってイマーム・レザイ廟に寄進された農業関連のワクフが、サファヴィー朝、アフシャール朝、カージャール朝という三つの時代にそれぞれどのように変化したのかを、時間の縦軸に沿ってさらに詳細に跡づけていくことも必要であったように思われる。ワクフ文書に出てくる農地や村落の名前を地図におこし、それらが三つの時代を通じて継続したのか、あるいは荒廃、接収によって消失してしまったのか、ミクロな視点から詳述すると、マシユハドという地域社会のあり方がより一層鮮明に浮かび上がってきたのではないかと思われる。

以上、長々と書き連ねてきたが、社会経済史的な分析という点で課題は残されているものの、イマーム・レザイ廟の運営組織を制度史の面から見据えた宗教社会史として、杉山君の論文

は、これまでのワクフ研究において、このような視点からのそれが日本のみならず欧米諸国、イランにおいてすらほとんどなされてこなかったという点で学界に重要な一石を投じるものであり、優れた研究だと評価できる。また、貴重なワクフ文書を発掘した努力と難解なペルシア語史料を駆使した語学力を考え合わせると、杉山君の論文は、学位請求にふさわしい内容と資格を備えていると考える。ここに審査員一同は、一致して杉山君に博士（史学）の学位を授与することが適当と判断するものである。

論文審査担当者

- | | | |
|------|---|-------|
| 主査 | 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員 | 坂本 勉 |
| 副査 | 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員 | 長谷部史彦 |
| 副査 | 慶應義塾大学言語文化研究所教授 | 野元 晋 |
| | Doctor of Philosophy, McGill University | 坂本 勉 |
| 学識確認 | 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員 | |